

帝国主義の腐朽性に抗し
共同反革命を蜂起-内戦へ！
共産主義者同盟（戦旗派）

戦旗

4月20日
5日、20日発行
402号
1部 100円
編集発行人 鹿島 昂
購読料 1部 20回 2600円
(郵送料含む)

戦旗社

東京都新宿区新宿5の2の9
コーポハビービルE1号
電話 03 (356) 2982
振替 東京 26110

5.23狭山再審決戦勝利. 6月東京サミット粉碎の

春期人民決起をかちとれ

危機のりきりを策す日帝・ 大平の反動攻勢をうち破れ

全国の同志・友人の皆さん！
三・二五三里塚現地闘争は、一万七千五百という五・二〇闘争以来の大人民決起をもって
勝利的に打ちぬかれた。
管制塔占拠―破壊を頂点とする昨三・二六開港阻止闘争を記念し、この闘いをひきつぎ発
展させるなかで、二期工事阻止・空港完全廃港をたたかいとらんとする全国人民の巨大な意
志が、再び三里塚の地に現出した。権力の不正・暴虐とまっこうから対決し、農民の大義・
人民の正義をまもりぬかんとする一万七千人民の大喚声によって、七九年階級闘争の火ぶた
は切っておとされたのだ。
われわれは、この三・二五闘争の成果をしっかりとにぎりしめ、いよいよ激闘の七九年春
期大闘争へとうって出るのでなければならぬ。
四月元号法制化強行、五月狭山再審棄却、六月東京サミット開催として反革命攻撃を次々
とくり出さんとする日帝大平のもくろみに、人民の怒りの痛打を浴びせかけようではないか。
四―六月連続闘争を断乎としてうちぬき、七九年階級攻防の最大、最重要環たる三里塚二
期工区決戦、そして八〇年代闘争への勝利の展望をきりひらこうではないか！



3.25三里塚全国総決起集会に決起した被告家族(水野・吉崎さん)と奪還戦士達。(三里塚第一公園)

4・22新入生歓迎集会

主催 4・22集会実委

(東外大連帯する会・大正大三里塚狭山を闘う実委・他)

所 豊島区民センター5階
5時半開場 映画「圧殺の森」

イラン人民の勝利によって幕を明けられた七九年の世界政治過程は、カンボジア・ベトナム・中国の抗争という国際共産主義運動内部における対立・矛盾の激化を一方の極としながら、もう一方の極においては、こうした「労働者国家」群・第三世界の伸長に対する帝国主義の必死のまき返し戦略再発動として推移している。

われわれは、今日の情勢の第一の特徴として、イラン革命のきりひらいた新たな中東情勢、そこにおける米帝のまき返し策動を見ておかねばならない。

中東「和平」を通じた米帝まき返し策動の本質を見ぬけ!

二月十一日、イラン人民の武装蜂起による権力奪取「パーレビ王制に続くバクチアル反動政権の打倒」という歴史的勝利を手をこまねいて見まもるしかなかった米帝「カーターは「中東の憲兵」イランの脱藩によって大きな穴をあけられた米帝中東支配の再建にかけて、エジプト・イスラエル「和平」実現に奔走した昨年九月のサダト・ベギン会談・キャンブデービッド合意以来暗礁にのりあげていた和平交渉は、イラン革命によって尻をたたかれる形で、三月二十六日、エジプト・イスラエル平和条約調印にこぎつけたのである。

この条約と付属文書類によって明らかにされている合意内容は、①三十余年にわたる両国間の戦争状態を終結し、全ての関係を正常化する、②シナイ半島からのイスラエル撤退を三年以内に実現する、③ヨルダン川西岸・ガザ地区でパレスチナ自治機関を設けるための交渉を一年以内に完了する、などを骨子とするものであるが、この「和平」がまったくの欺瞞にすぎず、中東を更に大規模な戦争と緊張のルツボに叩きこむ以外のものではないことは明白である。

つまり第一に、この交渉が、中東問題の真の当事者たるパレスチナ人民―その代表としてのP.L.O.(パレスチナ解放機構)をまったく除外し、敵対して進められたものであるが故に、パレスチナ・アラブ人民の憤激と闘いを一層強める以外ではないことである。

ベギンは「自治は住民にのみ適用され、地域に適用されない」西岸・ガザ地区でのパレスチナ国家の建設は絶対に許さない」と公言している。このイスラエルのシオニズム・拡張主義が根本的に打倒されない限り、中東和平などありえないのだ。

第二に、「和平」が実は、現実的に戦争を準備するものであることである。

軍事議定書によれば、イスラエル撤退後のシナイ半島には軍備を高度化したエジプト軍が入り、国境付近にはイスラエル軍が集結する。更に、両国の「監視」のために国連軍(米帝を中心とする多国編成軍)が派遣され、米帝は「講和」したはずの両国に対して膨大な軍事援助を行うというのである。

こうした徹頭徹尾欺瞞的でパレスチナ人民への敵対でぬりかためられた「和平」によって、当事国は一体何をしようとしているのか。

まずエジプトは、日産二万五千バレルの油田を含むシナイ半島を「平和的に」とり戻し、米帝からの二十億ドルに上る近代兵器供与―軍事援助をとりつけた。また、疲弊した国内経済を直しのため、米帝からの年額十億ドルの経済援助を増額させ、さらに、米・西独・日による五年間百五十億ドルの経済再建計画(カーター・プラン)の実施―これが東京サミットの重要課題でもある―を期待している。

アラブ世界全体と対立し続けてきたイスラエルは、中東戦争で最大の敵国であったエジプトと講和し、南への陸路を確保した。失った油田や二つの戦略基地のかわりに米帝からF16ファイター戦闘機を初めとする三十億ドルの軍事援助と、十五年間にわたる石油供給の保証を得た。

そして何よりも米帝は、エジプト・イスラエル両国を自らの支配下におき、巨額の軍事援助をつぎこんで「中東の憲兵隊」へと仕立てあげんとくろんでいっている。ワシントン・テルアビブ・カイロ・枢軸の形成は、単に中東にとどまらず、西アジア・アラブ・アフリカにわたる米帝世界支配まき返しのための決定的なカギとなっているのだ。

ベトナム敗北を契機とする米帝の後退の間隙をぬい、アンゴラやアフガニスタン・エチオピア・シリアなどA.A諸国への進出をおし進めたソ連に対抗しつつ、中東での石油権益を何があんでも守りぬこうとする米帝は、イメン紛争への軍事援助にふみきるなど、このところ急速に政治・軍事的覇権の拡大に動いている。ベトナム戦争に介入しはじめた時と情勢はそっくりだ(米下院アスピニ議員)と非難されるほど、カーターまき返し戦略はこの中東「和平」を突破口に、全世界的にも発動されようとしているのである。

帝国主義の危機のりきりをかけた東京サミット開催を許すな!

カーター戦略にみられるような、帝国主義による危機のりきりをかけたまき返し策動の当面する最重要のカナメこそが、六月二十八―九日東京で開かれる七カ国首脳会談である。われわれは、この点を情勢の第二の確認点としておさえておかねばならない。

カーターによるペテン的な中東「和平」は、当然にもアラブ諸国による猛烈な反攻をよきおこした。

条約調印翌日の三月二十七日、O.P.E.C.石油輸出機構(関係協議会は、二年ぶりの上げを決めた昨年十二月にひき続いて原油価格の引き上げを決定(現行価格より九・〇五%十各国毎のプレミアム)し、三十一日にはエジプトとの断交と政治経済的制裁にふみきることとを決めたのである。

これによって、原油価格は昨年末から実勢で二〇%を上まわる急騰を見たことになり、長い不況からようやく脱出し、景気回復の兆しをみせていた日本やE.C諸国経済ははかり知れない打撃をこうむることになった。今後も数度の値上げが予想されるという不安定な石油情勢は、全世界的に再燃しはじめていたインフレ傾向に文字通り火をつけたのである。

O.P.E.C.による二年ぶりの原油値上げは、しかしながら決して、政治的報復としてだけ行われたわけではない。O.P.E.C.は、インフレによる先進国工業製品の価格上昇に原油価格をスライドさせる」という原則の下で昨年二月―今回の値上げを断行したのであって、これはまったく当然の権利である。

問題は、第三世界人民からの収奪や国内での減量経営、大資本優先の景気刺激策によって景気回復をなした帝国主義が、必ずその結果としてインフレをよびおこし、それが第三世界からの当然の対応としての原油・原材料の値上げをもたらしざるをえないという、現代世界の根本的な矛盾と対立の構造にあるのである。とりわけ、サウジアラビアとならんでO.P.E.C.内最右派として帝国主義への原油供給に積極的にならってきたイランの百八

十度の石油政策転換(「民族的資源保全」の立場から原油生産の大幅なダウンを発表)が、今回のO.P.E.C.値上げの重大なひきがねになっていること、重要産油国での革命派政権掌握による本質的かつ本格的な石油危機が、七三年オイルショックを上回るような規模と内容をもって帝国主義をみまわっていることに、われわれははつきりと着目しておかねばならない。

第一次オイルショック以来、各国帝国主義の動向は、景気上昇(七五年以来)にともなうインフレと国際収支赤字に悩むアメリカ、国際収支赤字にかかわらず景気が停滞し続けた日本・西独、赤字と二ヶタインフレによって破産寸前だった英・伊・仏という構造の下での対立抗争が続いてきた。昨年ボン・サミットにおいてようやく、アメリカはインフレ抑制と赤字削減政策を、黒字国は景気刺激と赤字削減政策をという相互の妥協が成立したにもかかわらず、米帝インフレ抑制政策が効果をあげないうちに、他帝国主義国の景気回復からインフレが世界的に再燃し、今回の第二次石油ショックへと至ったのである。文字通り帝国主義経済は、「死に至る病」に侵されたまま、国際収支不均衡の責任なすりあいをめぐって出口なき対立を続けているということなのだ。

こうした中で、帝国主義の危機のりきりをかけた東京サミットが開催されようとしているのである。

そこにおける最大の課題は、各国間経済マサツの調整もさることながら、かかる情勢を根本的に規定している第三世界「労働者国家」群への反革命的まき返しと謀議が中心とならざるをえない。中東のみならず、東アジアにおいても、在韓米軍撤退延期や、国交断絶にもかかわらず米台軍事協力の継続など、カーターによる無謀な軍事的まき返しがおし進められようとしている。

こうしたカーター戦略への信認とりつけと、各国帝の力量にみあった政治軍事経済にわたる責任分担の明確化をもって、危機にたつ帝国主義世界支配の延命をはかるものこそが東京サミットなのであり、われわれは不屈に進撃する第三世界人民との連帯にかけて、東京サミットを粉砕していかなばならないのだ。

サミット開催にむけて軍事外交・帝国主義的再編をおし進める日帝大平

こうした世界的な情勢の推移の下で、日帝大平は、国内政治過程を東京サミット開催にむけて収斂させ、サミット成功―衆院解散・総選挙というプログラムを作りだそうとしている。われわれは、こうした大平のもくろみをも第三の確認点としておさえておかねばならない。

まず日帝大平は第一に、サミットを前に一段と高まっている米・欧からの日帝黒字構造非難の声をとり静め、「極東の盟主」としてのサミットへの登場をおしはからんと外交攻勢に出ている。

三月初めから米帝は、ブルメンソール財務長官、ホルブルック國務次官補、オーエン大統領特別代表(サミット担当)と政府高官を次々に日本に送りこみ、政府調達問題(国鉄・電機など公営事業)への外国資本の入札制限撤廃問題)などを中心にした対日貿易不均衡の是正を日帝に迫った。米帝ばかりでなく、E.Cやカナダからも「日本は米国ばかりに顔を向けすぎてE.Cやカナダを軽視している」とつき上げをくった大平は、サミット本番での

日帝批判の全面化を恐れ、四・五園田訪米—ストラス米通商交渉特別代表の来日(四月下旬)一四・三〇大平訪米をもって、懸案事項の一挙解決をはからんとしているのである。更に大平は、訪米後、五月にマニラで開かれる第五回国連貿易開発会議(UNCTAD)総会への出席とひき続いてのオーストラリア訪問も決定し、アジア—環太平洋地域の盟主として、サミットに臨もうとしている。訪米中の園田の「私はアジアにおける共産圏内の紛争について、米国は介入するな、日本にまかせろと(米政府に)言った」などという発言の中にも、アジア唯一の帝国主義としての日帝の野望ははっきりと表現されているのである。

この外交攻勢と共に、大平は第二に、アジア最後の反革命生命線たる安保日韓体制を維持するための朝鮮戦争準備体制強化に本格的にのり出している。タカ派福田にかわる総裁選前後の「ハト派」ポーズなどすっかりかなくなり捨てた大平は、三月十八日には防衛大卒業式で「(外交ではなく)軍事力の整備・強化が総合安全保障戦略の根幹である」と訓示し、石田元最高裁長官(元号法制化実現国民会議々長)を出席させて核保有肯定、軍人勲章礼賛のあいさつを行わせた。

また翌十九日には防衛庁首脳を官邸に招いてアジア軍事情勢報告をうけ、こうした大平の軍備増強・戦争体制構築の積極姿勢に力づけられた防衛庁は「北朝鮮の軍事力増強」「南北対話のいきづまりによる朝鮮情勢の不安定化」などを理由に、四月永野陸幕長訪韓(実質会談を行うのは十年ぶり)―七月山下防衛庁長官訪米・訪韓と、日米「韓」の軍事会談をあいさつで設定したのである。

こうした軍事外交攻勢の活発化、大平の「姿勢転換」を、われわれは東京サミットへ向けた第二のポイントとしておさえておかねばならない。第三には、統一地方選での「保守勝利」をうけた国内の帝国主義的再編のより一層の強化である。

「革新惨敗」「保守回帰」と語られる統一地方選前半の結果を見て、われわれは、人民の動向そのものが自民党に回帰したのだと考えてはならない。東京・大阪等の首長選で、社共など「革新」支持票はむしろ伸びを見せており、「敗北」の要因は、公明・民社や一部では社会党なども含む中道勢力を全面的に自民党が抱きこむことに成功したことと社共等既成革新勢力内部の対立抗争が激化したことにあるのである。

自治官僚による全国自治体制覇と、これに抗することすらできない「革新」への幻滅、また、ブルジョア独裁の安全弁ともなっていた「革新自治体」の崩壊の中で、国内矛盾は一層深まり、人民の闘いは激化していかざるをえないのだ。

ともあれ、地方選のりきりに胸をなでおろした政府自民党は、当面する国会での元号法案、たばこ値上げ法案、健保改正法案などの成立と外交日程消化に全力をあげると言明している。

国会の議決なしで随時値上げできるよう法改悪を行うたばこ値上げ法案や、勤労人民の憎悪の的となっている医師優遇税制には手もつけず、大衆収奪の強化をはかる健保法改悪案などに先がけて、四月十日からついに元号法案の委員会審議が開始された。

十二日の「元号を使用しない公務員は懲戒処分が当然」などという国会答弁を見て、

政府自民党が元号法制化を通じた帝国主義的皇制支配の確立にかけける執念ははっきりと見てとれる。ゆらぎかかった帝国主義の屋台骨を支えていくために、天皇の軍隊・官僚、警察を強化し、差別排外主義思想をおりたてていくためのテコとして、元号法案の今国会成立(十九日委員会採決、二十日に本会議上程―可決を策謀)がやみくもに急がれているのだ。

さらに、五月には、岡原にかわって新たに最高裁長官に就任した服部体制の下で、無実の石川氏を永遠に獄舎につなぎとめ、部落差別に再度の法的追認を加えるための狭山再審却下策動がもくろまれている。

七九春闘圧殺―徹底した合理化と産業再編成攻撃の激化などを含め、全社会的におし進められている大平の帝国主義的再編―反革命攻勢の数々をわれわれははつきりと見すえ、その頂点たる六月サミット・五月狭山・三里塚、四月元号法制化の攻撃との対決を、全党の総力戦でもってうちぬいていかねばならない。

春期人民決起をかちとり、日帝大平の反動攻勢をうち破れ!

四月元号、五月狭山・三里塚、六月東京サミットという七九年春期後半の闘いを、われわれは一つ一つの個別課題をこなすという闘いに終始するのではなく、一連の同一の質をもった闘いとしてうちぬいていくのでなければならぬ。

東京サミットへと収斂する闘いの中で、広範な人民決起をかちとり、その最先頭で日帝大平の反動攻勢をうち破っていくこと、これが今春期における第一の任務である。既に確認してきたように、われわれをとりまく内外の情勢は比類もなく重大なものとなってきた。七三年石油戦略発動、七五年インドシナ解放、そして本年に入っているイラン革命勝利と第二の石油危機現出という第三世界人民の息つくひまもない攻勢の前に、帝国主義は疲労困憊し、互いに罵りあひながらみじめな結束をかため、遂には一切勝算のない侵略反革命戦争に訴えてまで延命をはからんと、最後のアガキを続けている。

中東「和平」から東京サミット合意をもって危機のりきりをはかる帝国主義の動向、とりわけ、サミット開催へと反動攻勢を集中している日帝大平に対し、われわれもまた、帝国主義の基調的動向と真向から対決する戦略的闘いの実現として、今春期の闘いとらえておかねばならない。つまり、第三世界人民や部落大衆・三里塚農民の闘いに謙虚に学び、職場地域の最深部に自らの立脚点をうちたて、全国の広範な人民とともに、日帝の反動攻勢をうち破る闘いとして、連続闘争をたたかいてくるのだ。かかる闘いの陣型を今春期の激闘の中でかちとれるのか否か、八〇年代に向けた闘いの展望はここにかかっている。

七〇年代にきりひらかれた第三世界人民による英雄的な革命戦争の勝利、帝国主義放逐の闘いを、八〇年代においては帝国主義足下にあるわれわれ自身の血債をかけた総決起、帝国主義打倒の闘いとしてひきついでいこうではないか!

八〇年代闘争への展望をかけた総力戦で、今春期決戦の大爆発を闘いとうろう!

石川氏・部落大衆との内在的連帯かけ、狭山再審決戦に総決起しよう!

今春期における第二の任務は、二・一二集会在鮮明にうち打した石川氏・部落大衆との内在的連帯の方向をさらにうち固め、狭山再審決戦に総決起することである。

狭山再審をめぐる情勢は、最大の正念場というべき緊迫した段階に入っている。二月二十八日に提出された膨大な検察側意見書(二〇一ページ・四万字)は、弁護側による十一鑑定人・鑑定書のごとくを「新規性・明白性がない」と強弁してしりぞけ、「事実調べの必要なし」と日帝四ッ谷に再審棄却を迫っている。

これをうけた四ッ谷は、何と提出の翌日に、弁護団に対して意見書提出を命じ、五月末の提出期限後ただちに再審棄却の断を下そうと時をうかがっているのである。

一番浦和地裁内田(死刑判決)、二番寺尾(無期)、最高裁藤林・吉田(上告棄却)に続いて、権力の差別犯罪完成を急がんとする東京高裁―四ッ谷の再審棄却攻撃を、何としても阻止しなければならぬ。

われわれは、七九年の年頭にあたって、八・九上告棄却以降の狭山闘争―部落解放闘争へのかかわりの不十分性を総括し、狭山闘争の原点に再度たち帰り、差別の現実、部落大衆の実存に学びぬくことを決意して一・二六―二・一二闘争をうちぬいた。とりわけ、戦争と差別を許さない二・一二集会の中で、講師植松氏が解放同盟の闘いの真しな切開の中から「日常生活の中で、大衆と結びついて差別や天皇制と闘わねばならない」と頭から言ってもだめだ、地域の中に、大衆の生活の中に入りこまねば」と提起された内容は、われわれにそれを数倍、数十倍する反省と努力が問われへいることをはつきりとつきつけるものであった。

われわれは再度、これを想起し、うけとめて四―五月再審決戦を闘いぬくのでなければならぬ。

三里塚闘争戦士のほとんどが保釈され、ガランとした千葉刑務所の薄暗い作業場の中で、毎日コッソツと靴底をさざむ獄中十六年の石川氏の苦渋に少しでもにじりようろう。不況・失業の嵐が吹き荒れる被差別部落の日常の中から、「石川一雄の運命は全ての部落大衆の運命だ」と雄々しくたちあがる部落大衆の気魄に今こそ徹底して学びぬこう。

奪還戦士との団結うち固め、三里塚裁判闘争・木の根用水建設への大衆的決起を!

今春闘争第二の任務は、奪還された開港阻止決戦戦士との団結をうち固めつつ、二期工区決戦を見すえた三里塚公判闘争勝利、木の根用水建設への大衆的決起を作り出すことである。

三・二五第一公園の一万七千人民が見守るなかで、二期工区木の根の小川源さんは、「まわり中をコンクリートで固められようとも木の根の地で農業を守りぬく」「二期工事と対決し、土地要塞・人間要塞で闘う」とすさまじ

い闘魂をひききし、木の根地区の農業を守りぬくためのかんがい用水施設建設にむけた全国人民の協力を訴えた。

この木の根用水建設は、「用地外では成田用水、用地内には木の根用水」などという性格のものでは全くないし、また、権力が騒がたてているような「横堀要塞に続く地下要塞」というようなものでもない。三里塚農民のたたかいを、農業生活の面から切り崩さんとす成田用水「農振計画」の腹黒いたくらみと真向から対決し、農業を農民自身の手で、人民の力で発展させることによって闘う根拠地三里塚を守りぬかんとする革命的な事業なのだ。

われわれは、今春三里塚の闘いにおいて、まず第一に、全国の三里塚支援勢力とともに労働の団結をうち固め、この木の根用水建設事業への全党の決起をかちとっていかねばならない。

整風運動の成果をもって地域・職場・学園での人民との結合を更に深めよう!

そして第二に、奪還戦士との団結をうち固め、三里塚公判闘争を持続的に闘いぬくと共に、「管制塔公判を支える会」の大衆的展開をかちとって行くことである。

一年になんなんとする長期拘留を闘いぬき、不屈の革命戦士へときたえあげられた三月―五月の開港阻止決戦戦士は、管制塔戦士の水野・山下両同志を除き十一名全員が四月初めまでに保釈奪還をかちとった。わが身を捨てて完結・非転向の獄中闘争を闘いぬいた同志たちの闘いがあつたからこそ、わが戦旗派の開港阻止決戦の勝利は不動のものとしてうちたてられたのである。われわれは、奪還された同志たちに心から敬意を寄せ、喜びを分かちあひ、団結を固めて今後の三里塚公判闘争の勝利的展開を闘いとって行くのでなければならぬ。

われわれは、昨年末から今年にかけて、これまでわれわれの闘い、すなわち狭山闘争―部落解放運動へのとり組みや、三里塚現地で生じた諸問題を切開することの中で、党をあげた整風運動を展開してきた。その中には、被差別大衆や先進的人民の闘いを理念のレベルで、理想化した形で見かたえられず、その実存をまっすぐ見つめ、実態に迫り、対象の共感をうることできるような主体の深化・強化を十分にかちとりえてこなかった観念的作風の存在が、まず第一にあばき出されてきたわけである。

われわれは今春期第四の任務として、かかる整風運動の成果を物質化するべく、地域・職場・学園での人民との結合を徹底的に深めていくのでなければならない。

3・25 三里塚現地総決起集会

万余の人民決起で

二期工事着工粉砕を宣言

「農地を要塞と化す」

木の根灌漑要塞建設をかちとろう!

全国の同志・友人諸君!

昨年三・三〇開港を粉々に粉砕した三・二六空港包囲・突入・占

に内在的連帯をかちとりうる革命主体の飛躍をめざすものとしてあ

検問体制突破し、佐藤同志、闘いの先頭にたつ!

拠闘争勝利の一周年を記念して開

昨年開港阻止闘争に匹敵する一

午前十時すぎ、会場の三里塚第

催された三・二五集會は、三・六

万四千の機動隊を動員し、かつて

一公園に機動隊の弾圧を蹴って堂

森山運輸相の二期工事年内着工

ない徹底した弾圧、検問体制を敷

々と登場した戦旗派四百二十の部

宣言と真向から対決するものとし

いて闘争圧殺にのりだした日帝・

隊は、独自集會をかちとり全体集

て闘いぬかれた。

大平の策動に抗し、三・二五闘争

隊は、独自集會をかちとり全体集

またわが戦旗派にとっては、全

は、結果した一万七千人民の二期

会に臨む。

攻撃と一年間にわたって不屈に闘いぬいてきた佐藤一郎同志は、以前にも増す確信と熱情を満面にたたえ、戦旗派の先頭にたつて闘う決意を明らかにし、全同志は、割れんばかりの拍手と、必ず自らも佐藤同志につづいて闘うのだという気迫を全身にみなぎらせ、これに応えた。

こうして独自集會において全同志は、第一に、人民の大義をおし

たてて勝利した三・二六戦闘精神を受けつぎ、打ち固めて闘うこと、第二に、三里塚へのかかわりの外在性を克服し、三里塚農民との根底的連帯をめざし、農振計画・成田治安法適用を通じた闘争破壊と対決し抜いて闘うこと、第三に、二期工事年内着工宣言と真向から対決し、これを打ち破るべく闘うこと、第四に、管制塔戦士水野・山下同志をはじめとした三里塚獄中戦士と連帯し、戦士奪還・公判闘争勝利をかけて闘いぬくことを固く誓いあったのである。

反対同盟、二期工事年内着工粉砕宣言を発す!

午後零時半、三・六森山発言に對し、三・一〇たいまつデモで即座に徹底抗戦をぶちあげた反対同盟農民の入場、そして動労中央の反動的な「執行権停止」攻撃をはね返し、あくまで三里塚農民との連帯をかけて闘う動労千葉の入場によって集会は開催された。

基調報告にたった反対同盟・事務局長北原敏治氏は、三・二五闘争の位置を、二期工事年内着工に對する、新たな決戦へ向けた戦闘体制を整えるものであることを鮮明にし、農業振興策・成田治安法適用という国家権力の攻撃の性格を毒アメとムチによる農民分断解体策動であること、これと徹底対決し、用地の中に新たな拠点を建設して闘いぬく、という二期工事

阻止宣言を發した。満場の人々は、反対同盟の戦闘宣言を胸に刻みこみ、周辺住民の結集をかけて、再度成田市議選へ出馬する北原敏治氏へ、熱烈な声援を送るのであった。

「農地を要塞と化す」二期工事阻止、木の根灌漑要塞建設の檄に応えよ!

反対同盟敷地内農民を代表して小川源さんは、三・六森山発言に抗し、用地をもつかぎり断乎土地はわたさない、「決意を毅然として表明し、「農地を要塞と化して」闘うため、「未代まで頑張る営農の展望」をもって、「反対同盟共有の木の根灌漑事業をおこす」ことを明らかにし、全人民がこの事業に結集することを訴えた。

この小川源さんの「木の根灌漑要塞」建設の檄こそ、三里塚農民が十四年にわたる権力との日々への徹底対決と、その中から政府による農民殺しの農業政策を見抜き、農政にたよらず、農民が自立し、農民として生き抜く生きざまを示しぬかんとしたものである。

われわれは、三里塚農民魂をこに見るのでなければならず、如何にして三里塚農民と連帯し得るのか、厳然と人民の前にそびえたつ革命の根拠地三里塚に如何に連帯してゆくのか、鋭く問われたのであった。

被告家族会、三里塚闘争への連帯を表明!

三・二五集会へは、全国津々浦々から巨万の人民の結集がかけられ、共闘団体の発言は二十団体を数えた。

本集会には、開港阻止決戦被告家族会が、はじめて四十名という大衆的結集をもって参加した。共闘団体の発言に続き、家族会を代表して、管制塔占拠戦士水野同志のお母さん、空港突入戦士吉崎同志のお母さんが発言にたった。

水野さんは、「息子が管制塔をぶちこわしたことに誇りを持つようになつた。公団や政府、裁判官がやっていることはむちゃくちゃです。私も頑張らねばと思ひ集会に参加した」と発言し、吉崎さんも「三里塚のお母さん達につづいて頑張つてやってくきたい」と連帯を明らかにし、満場の拍手で迎えられた。

被告家族会の広汎な結集は、三里塚闘争の正義性を一層鮮明にするものとして、いよいよ、ぶ厚い闘いの陣型を創造しているといえるのである。

集会後のデモンストレーションは、岩山に向け果敢に闘いぬかれ、森山の二期工事年内着工宣言を今



小川源さん、木の根の大地を守るかんがい事業を全人民に訴える

3・25全人民決起に向けて 各地で三里塚集會うち抜く

三・二五現地総決起をからとるべく、各地区で三里塚集會が成功裡にうち抜かれた。

3・13第一回ちば労働学校は、千葉市民会館に労働者・市民数十名の参加をもちと、これを出発点として今後とも三里塚を軸とした集まりを進展させていくことが確認された。第二回は五月、加

瀬勉さんを迎えて開く予定。

3・15三里塚「大義の春」上映集會は、豊島区民センターで六十余名の首都圏労働者の結集をもち、ちばとられた。三里塚の堀越さくら

「仲宗根姉弟を支える会」や、3・26戦士吉崎君のお兄さんのあいさつ、そして、「北区連帯する会」、区職労働者の連帯あいさつが行わ

れ、全体で3・25への決起を確認した。

3・17三里塚映画「大義の春」上映集會では、神奈川の労学五十数名の参加で、相模原補給廠監視団、部落解放北懇談会、町田救援会の連帯あいさつ、そして管制塔戦士山下君の獄中アピールをうけて成功裡にちばとられた。

にも吹き飛ばさんばかりの勢いをもって勝利的に打ち抜かれた。すべての同志・友人諸君! 二期工事阻止・廃港決戦への突破口は、三・二五闘争をもって切り開かれた。反対同盟の「二期工事阻止」宣言、そして「木の根灌漑要塞建設」の檄に、全人民の総力を結集してこの大事業に貢献しようではないか。

われわれはこの闘いの中で、三里塚農民との根底的連帯をめざし、八〇年代日帝・大平の侵略反革命をも打ち破る革命主体の飛躍をとことん闘いつつゆくのぞめなければならぬ。いざ進撃せよ!



開港阻止決戦一周年を迎え、二期工事阻止の必勝の決意うち固める1万7千人民(三里塚第一公園)

3・18三里塚・狭山を闘う埼玉集會は、埼玉糾弾共闘、水野君を守る会をはじめ、水野さんら被告家族、北瓜製縫工場の人々、和光郵便局の仲間や「田代君を守る会」など約百名の参加のもと、盛大にちばとられた。

また、3・18三里塚・日本原と連帯する関西集會、3・21三多摩集會、そして名古屋でも同様のた

たかいがとりくまれた。こうしてわれわれは、3・26戦闘がつくり出したたたいの大衆的広がりと結びつくべく、この一年間のたたいの成果を結実させて、3・25に向けた全党全人民のたたかう意志を大きくつくり出していったのである。

検察側抗告はねかえし

十一戦士奪還をかちとる

意気高らかに戦線復帰を宣言!

三・二五闘争を前後し、勢川同志につづいて開港阻止決戦戦士十名の奪還がかちとられた。

十カ月から一年にわたる不当な長期勾留を弾劾しつつ闘いぬかれた今回の保釈闘争にあたって、検察側は、保釈許可決定に対する抗告を全員に対して行うという暴挙におよんだ。

その理由たるや、三・二五闘争に参加する可能性が強い、なる予防拘禁をも意図した許すまじき反動的なしるものである。以下、奪還戦士の復帰宣言を掲載する。

3・26被告 勢川 雅彦

保釈をかちとって一カ月が過ぎました。獄中では思うことすべからず、自分の生き方を貫くことはできていると思っています。

今こうして獄外にあって考えることは、自分が試されることに獄中も獄外もかわりないということ、一年の獄闘を意義のあるものにするのも、これからの活動をしつかりと行っていくことにかかっていると考えます。

水野君、山下君、共に頑張りましょう!

5・20被告 松本 節子

家族・同志・友人達の暖い御支援を心より感謝致します。皆さんの支えがあったからこそ、私は闘い抜くことができました。この時ほど仲間達の存在の大きさ、ありがたさを強く感じたことはありません。

高額保釈金攻撃うち破り

11・4戦士を奪還

四月六日、多くの三里塚戦士の奪還につづいて、11・4天皇式典三戦士が奪還された。

一月二六日の東京地裁森岡による全員実刑判決と、同じく森岡による控訴保釈拒否によって二カ月前にも増して元気に奪還されたのだ。

高裁刑事七部(小野慶二裁判長)は、三名に対して、川島一百万円、山田・永田一百万円の高

戦士十名の保釈奪還は、かかる戦前の治安維持法的な弾圧、あるいは、百万円という高額保釈金攻撃をはね返しつつ闘いとられたのである。

長期勾留、東京移送などの弾圧と不屈に闘いぬいてきた戦士達は、全員元気に出獄し、すぐさま三里塚におもむき、農民との交流を通して、更なる闘いの決意を打ち固めたのであった。

以下、奪還戦士の復帰宣言を掲載する。

5・20被告

野崎 まゆみ

獄中闘争で学んだことは、長期的展望にたつて現実から問題を立てていくということです。目先の事に追われてただ自己満足的に闘っていくのでは今後闘うことはできない。自らの弱さや闘いの深さを知っていく中で、はじめて闘うということを主体にひきつけて考えられるようになりました。種々雑多な社会の中で生きてい

く今後の人生に対して大きな指針を見出せたように思います。それをどう実践していくのかが今後の課題です。獄中で培った経験を生かして更に努力していきたいと思えます。共に闘わん!

3月要塞戦被告

仲宗根 盛秀

様々な勾留引延ばし策を講じられつつも、三月二十九日、ついに出版しました。

出獄後、様々な人から感想を聞かれましたが、一年間という比較的「短い」期間だったこともあってか、不思議と冷静でいられました。ふり返れば逮捕された時も、そうだったような気がします。ただ、僕の頭の中で一貫して考え続けてきたのは、あの一昨年、要塞建設闘争が開始された時、建設隊の間で確認された「心の要塞を創ろう」という言葉でした。

3・26被告 吉崎 邦夫

四月五日帰ってきました。様々な支援活動本当にありがたうございました。この一年間の獄中闘争は自分の過去・現在をみつめ、未来を展望して「生き方」を考える場でした。

このかんの成果にふまえ、日本革命へ登りつめる大きな流れの中で、自分が何をやるべきか、そして成し得るのか、大衆と共に歩み考え行動してゆく中でつかんできたと思います。家族と共に頑張ります。

5・20被告 細野 和枝

私にとって獄中闘争は、つらく厳しい闘いであったと同時に明るく楽しいものでした。それは三里塚闘争の大義、自己の正当性を増々確信しえたからであり、獄内外を貫く団結に支えられていたからです。弾圧は人民を打ち鍛える以外ではありません。まだまだ不十分で未熟な私ですが、獄中で培った「不屈」の戦闘精神をバネとし、あくまでも人民の利害を守りぬいていきます。管制塔戦士と共に勝利の日まで闘いましょう!

5・20被告 青池 ひかり

三月二十七日、夜七時半、ドアを出ると突然拍手と喚声に囲まれた。十カ月の獄中闘争の終止符だった轟音下で闘う三里塚農民、援農闘争にかけ回ってくれた同志達、手紙を通じ激励してくれた獄中者達私の獄闘を支えてくれたこれらの人々に心から感謝する。

5・20被告

仲宗根 京子

三月二十七日、鉄の扉が開いた時、ヨシヤルゾー! と闘いの決意が一層強くなった。

坂志岡、共同墓地に眠る東山黨さんの墓前で、われわれ五・二〇第三グループ被告団と弁護団は、公判闘争勝利、三里塚闘争勝利へ向けて、共に最後まで闘いぬくことを誓った。

全国の同志・友人・家族、そして反対同盟の皆さん、心からの御支援をありがとうございます。弟も二日後保釈をかちとり、共に一生権力に立ち向い、人民と共に歩むことを誓い合いました。

3月要塞戦被告

栗田 吉夫

同志・友人の皆さん! 私は千葉刑における一年間の獄中闘争を経て、三月二〇日に保釈をかち取りました。今後も二期工事阻止、空港廃港に向けて、また八〇年安保一日韓闘争の勝利をめざして闘い抜く決意です。

獄中で私は、獄中人民の実存と闘いに学ぶことができましたし、組織として団結して闘うことを知ることができました。更に獄外でも、日帝―大平の朝鮮侵略反革命と対決し、八〇年代の激闘に勝利すべく、共に闘いぬこう!

11・4被告 永田 厚

短い期間でしたが、獄外の最も信頼する仲間達、家族・友人の皆さんの熱い支援と連帯に心より感謝します。

わが魂は獄中にあり―金芝河をまねするわけではないけれど、わずかに二カ月間の獄舎生活と保釈をめぐる最後の何日間かのあわただしさの中で、いまだ十分に対峙しきれないまま獄中においてきたもう一人の自分をしっかりと見つめつつ、今後のたたかいを開始していきたく思います。ともに最後の日まで 勝利の日まで!

管制塔裁判

坂本が転任、

刑事14部の反動

花尻新体制をうち破れ!

四月六日、第六回公判は、坂本裁判長の東京高裁への転任にもならない、地裁十四部花尻尚の刑事八部裁判長への着任によって更新手続きとして行なわれた。

次々と意見陳述にたつ被告達は、坂本裁判長の反動的訴訟指揮の数を糾弾し、「花尻裁判長も坂本のような裁判を行うつもりか」と鋭くせまっていた。

地裁花尻は、これまで地裁刑事十四部の部長として、八部坂本とともに東京地裁反動化の尖兵となってきた。

昨年来、被告人に対する弁護人の地裁接見について、接見時間十五分という旧来の慣習を破り、十分に制限するという妨害策動を、あるいは身柄の処分について弁護人との話し合いは一切応じないなどという暴挙を繰り返している。

又、三里塚関係では昨年十二月提出した開港阻止決戦東京移送被告全員の保釈申請に対して、拘留十カ月という全く不当な長期拘留

という事態にもかかわらず、一轉保釈不許可の決定を下すというありさまである。

従って、花尻は、坂本におとらげ、いや坂本以上に反動的なやからであることに注目しなければならぬ。

依然として「弁護士抜き裁判」を頂点とした司法の反動化が吹き荒る今日、武装を堅持し、管制塔裁判闘争を闘い抜くこと、これがわれわれに問われているのである。

3・27第五回公判、坂本またしても弁護士二名に退廷命令

三月二十七日、第五回公判においては、月二回全日公判という月三回公判実質化攻撃の実際的な弊害を、被告・弁護団は、徹底して追及した。

二十七日当日は、前田被告については、千葉で七月仮処分裁判も行われる日でもある。前田被告は、千葉の裁判に出廷したいとの申請

を出していたが、強引にも管制塔公判の方に引き出された。

この裁判所の不当な対処と、月三回公判実質化攻撃の反動性をあばく被告団・弁護団の闘いに、坂本は、発言禁止を連発し、発言禁

止に対する議申立てをなさんとする青山・杉井両弁護人を、あるうことか退廷させてしまった。

坂本は合法的な訴訟手続きである異議申立てさえ、「法廷警察権の方が優先する」なる驚くべき詭弁をろうして圧殺し、それにとどまらず、弁護人を退廷させ、弁護士抜き裁判を実態化させるという許すまじき攻撃を加えてきたのである。

全国の同志・友人諸君!

坂本の反動的訴訟指揮を徹底弾劾し、花尻新体制下の管制塔裁判闘争を三里塚二期工事阻止一廃港決戦の重要な一翼として勝利に向け闘い抜いていこうではないか。

公判スケジュール

4月18日	8ゲート2G(吉崎他)午前10時より、東京地裁
同日	8ゲート3G(勢川他)午前10時より、東京地裁
同日	3月要塞2G(仲宗根盛秀他)午後1時より、千葉地裁
25日	5・20、2G(松本・細野・長谷川美里他)午後1時より、更新手続、東京地裁
26日	管制塔(水野・山下他)午前10時より、東京地裁
27日	2月要塞(宮崎・内野・渡辺他)午後1時より、千葉地裁
5月7日	5・20、3G(仲宗根京子・長谷川優子・青池・野崎他)午前10時より、東京地裁
5月9日	8ゲート2G、午前10時より、東京地裁
同日	8ゲート3G、午前10時より、東京地裁
同日	5・20、2G、午前10時より、東京地裁
5月14日	3月要塞2G、午前10時より、千葉地裁
5月15日	3月要塞1G、午後1時より、千葉地裁



強力除草剤散布を 実力粉砕!

「おめえら百姓を殺すつもりか!」4月3日十部三部落において空港公園は悪名高い強力除草剤(ボロシル4)の散布を強行せんとした。

「農地を破壊するものは許せない!」かけつけた五十余名の反対同盟・支援の追求の前に、公団は「昨年は被害が多かったから、今年には耕地からはなしてまくから大丈夫」とアタフタと言いつけに必死。北原事務局長、石橋さんの抗議について成田市当局にさえ了解を得ていないことが暴露され、そそくさと逃げ出した。

十部三部落で頓挫した公団は三時すぎ今度は機動隊二百名を前面に出し横堀部落に侵入せんとした。更に屈強さを増す反対同盟・支援は機動隊をはねとばし、作業員の行手に立ちはだかる。「胆精こめて耕してきた農民の気持ちわからねえか!」公団に雇われた作業員も農民の正義の叫びにうつむき

足もすくんでしまう。力でもって強行せんとした除草剤散布も完全に粉砕された。

荒地にまくのではなく耕作地にまくというこの矛盾した除草剤散布の意図は、用地内で生活し闘う反対同盟の農業を破壊し、二期工区内農民の孤立を計る許しがたいものだ。

十部三の岩沢さん、木の根の源さん、横堀の熱田さん等、昨年風雨によって飛ばされたボロシル4の被害は巨額にのぼる。「農業振興」を云々する政府―公団の本音はまさにこの行為によって明らかだ。岩山部落など公団用地を荒し放題にし雑草の種をまき散らし、かたや用地内では周辺広く被害の及ぶボロシル4をまき散らしている。公団にとって「農業振興」などこれっぽっちも考えていない。ただただ空港建設を強行せんがため、反対同盟を切り崩さんがための農民殺ししか頭にないのだ。

4月5日横堀部落では今回の事態に対し部落集会所が「横堀宣言」を採択した。「われわれは

われわれの居住する地域における大地・太陽・大気そして水をわれわれ自身のために管理する三政府・公団はわれわれに対する侵略者でありこの侵略者を地域から追放するために廃港まで徹底的に闘いぬく」この宣言を前に3月17日には昨年除草剤散布によって荒らされた畑を奪還すべく、耕し、野菜の種をまいた。

農民の不屈の魂を示す如く作物の芽は公団の除草剤に抗し青々と力強く成長している。この畑耕作・「宣言」は成田用水・農振計画を除草剤散布と真向から闘う宣言布告である。

「農地こそ人間要塞!」

―小川源さん

「農振計画・成田用水粉砕し二期工事の野望を打ち砕く木の根がながい用水を!」3・25集会において小川源さんは「年内着工」をもって農地を破壊し、土地を奪いとろうとする政府―公団に対し挑戦状をたたきつけた。

源さんは一九四六年開拓農民として入植した。「おこすのに一日も二日もかかる木の根っこのごろごろした原野を本場に朝星、夕星懐いてトンビグワ一丁で育ててきた。」よその家でヨモギもちをくつんでたから子供らがヨモギを

くにも餅米ねかつただよ。何とも辛い想いであつたよな。だから子供に餅一つくわすこともできねえで、じゃがいもかじりながら手さ赤くはらして創りあげてきた農地を「国策だ」といって金をつまらしたって見むきもしねえ!

苦しい開拓の歴史は源さんの闘いの源泉である。何者もこれを揺るがすことはできない。今、土地を武器に源さんは生涯をかけた闘いを政府―公団に挑む。

「要塞戦など闘ってきても思うんだが物は壊されちまうが土地こそ人間こそ要塞であり、これが一番強い!」木の根用水はその意味で闘う人民の共有物として、二期工事に向けた農地要塞としてあるんだ!」

「強制収用かけようが絶対この地に手をつけさせない!」公団とおれらとどちが正しいか白・黒つける闘いこそ二期の闘いだ!!」政府―公団は「二期工区内に地下要塞を作ろうとしている。土地収用法違反だ(3月26日読売)」と階級的憎悪をむき出しに敵対せんとしている。

同志・友人達! 権力の妨害を粉砕しこの源さんを始めとする反対同盟農民の苦闘、この壮絶な決意になんとしても応えぬき、人民の用水を建設し、二期着工うち砕き廃港に向け前進しよう!

5.18戦士に有罪判決

全員に懲役三年・執行猶予五年

三月二十九日、千葉地裁で行われた鉄塔決戦横芝幹部派出所攻撃五・一八決起の判決公判で、刑事一部近藤裁判長は、三名の被告（富成千之・矢吹敏治・大口洋一郎君）に対して「懲役三年・執行猶予五年」という有罪判決を下した。この判決は、①「現住建造物放火未遂」という重罪デッチ上げをそのまま認め、②弁護側による「任意同行―緊急逮捕」過程での違法性・不当性の追及を頭からしりぞけ、③鉄塔破壊・東山君虐殺という国家権力の違法行為に対する人民の正当な抵抗権を無視し去った「検事側論告のひきょうつし」としか言いようのないしろものである。

われわれは、千葉地裁・近藤の、三里塚闘争への敵対と階級的報復の意図にみちみちた五・一八有罪判決を、怒りをもって弾劾する。被告・弁護団の精力的で原則的な法廷闘争の展開と、被告家族や三里塚農民、闘う仲間たちの暖かい支援の力で、実刑攻撃こそ粉砕したものの、「三年―五年」という量刑は決して軽いものではないし、そもそも三里塚を闘う人民の闘いは全て無罪であり、裁かるべきは権力―裁判所そのものであるのだ。

われわれは無念なりとは言え一審段階での一応の結着を見た五・一八公判闘争―三戦士の闘いをふり返り、今一度彼らの闘いに学び直していかねばならない。

五・一八戦士は、千葉県警の長時間にわたる拷問的取調べとの苦痛にみちた闘いや、一段と弾圧・制約の厳しい千葉刑での一年四ヵ月にわたる獄中闘争の中で、破防法弾圧に抗する革命主体のあるべき方向を全党に訴えてきた。五・一八戦士の勝利や敗北、その一つの教訓が、開港阻止決戦々々たちの楽天的で戦闘的な獄闘の展開を可能とする条件を形づくったと言っても決して過言ではない。

五・一八戦士は、十一・四戦士とともに、青年期の党派である戦旗派の闘いに魂を吹きこみ、その不滅のいしづえとなつて闘いぬいてきたのである。

迫りくる二期工区決戦、八〇年安保粉砕の大闘争に向けて、全ての戦士が五・一八戦士の闘う精神をわがものとし、破防法弾圧に屈することのない革命主体への飛躍をかけて闘いぬいていこうではないか！

戦旗

反マル生闘争を高揚をひきつぎ

全通労働者が決起

三里塚被告防衛、79春闘勝利を決意

三月十九日、全通労働者救援連絡会の呼びかけに応え、首都圏から百数十名の全通労働者が中央労働会館に結集した。集会では、79春闘ストライキ実現・3・25三里塚現地への決起を確認し決意を固めた。

集会は六時半から開始され、初めに全通労働者救援連絡会の仲間から「労使の聖域―年賀を粉砕した反マル生闘争は、労使間紛争から階級闘争へと登りつめた。この成果を発展すべく三里塚全通被告を守り、懲戒免職処分、5・20年休処分に対する民事裁判に勝利しよう」と提起された。

それに続き、被告家族を代表し晴海局吉崎君のお兄さんが「被告を守るのが家族の任務であり、私塚は空港廃港へ向け被告を守りきる」とあいさつすると会場一杯の拍手がわき起る。

そして、三里塚全通被告団を代

表して和光局水野君の獄中アピールが代読される。「三里塚闘争と春闘を結合させ、大平打倒の一大闘争を構築しよう」という獄中アピールで、参加者全員が獄中同志達に思いをはせる。

その後、角南俊輔弁護士の有事立法と労働運動についての講演・東京南部地区の闘争報告、電通宮城の奪還された仲間の就労闘争報告、動労千葉のメッセージの代読が行われ、労働運動の右翼的再編に抗し、階級的労働運動の構築がわれわれの任務であることが確認された。

反対同盟からは、東峰十字路戦の被告であり青年行動隊長である辺田の竜崎さんが参加され、三里塚における権力の暴挙を列挙し糾弾した。

発言のしめくりに「水野君を守る会」が決意表明し、管制塔裁判における坂本裁判長の「弁護人

帝国主義の人民抑圧、闘争破壊と闘う
全ての人民の政治機関紙

戦旗

定期購読料(郵送料) 申し込み先 戦旗社

10回 1,300円
20回 2,600円

東京都新宿区新宿5の2の9
コーポ・ハッピービル E1号
振替 東京26110

定期購読しよう！

抜き” 被告人抜き” 裁判の実態を暴露し、「裁判闘争勝利・3・25三里塚闘争へ総決起する」と決意が示された。

最後に全員がインターを合唱し労働連帯の強化と、全通中央の屈服を許さず79春闘のストライキ闘争への構築を確認し解散した。



約百名の結集で3.25三里塚決起、狭山再審決戦勝利の意気に燃えてかちとられた3.18三里塚・狭山を闘う埼玉集会

(川越市南公民館)

4・22新入生歓迎集会へ!

新入生諸君! 大学当局—文部省の学生管理支配を打ち破り、闘う人民の戦列に参加しよう!

学生共闘会議

すべての新入生諸君! 先進的学友諸君! 六八年〜六九年全国で闘われた学園闘争から十年が経過した。そして、この十年間の学生の闘いの多くは孤立し、「冬の時代」と言われ、まったく不十分なものでしかなかった。

しかし八〇年を目前にした今日、日大や中大をはじめとした多くの学園で大衆的闘いが巻き起こりつつある。それらの闘いは、全国的にはいまだ統一の形態を与えられていないし多くは分断されたままである。しかしその中で闘っている学友達は、はっきりと八〇年代の学生運動の高揚を確信しているし、そうでなければならぬと感じているのである。

われわれ学生共闘会議は、八〇年代学生運動の高揚を何ともしもかちとらねばならないと考える。日帝の朝鮮出兵に向けた全社会的再編の嵐と対決する人民の戦列の先頭に、革命的熱気にあふれた学生の隊列をつくり出そう。新入生諸君! 新たな高揚に向けた方向を共に確認し、戦列を共にしようではないか!

一、日帝ブルジョアジーによる差別選別教育・大衆収奪の強化を許すな!

本年一月十四日、十五日の両日、初めての共通一次試験が行われた。この共通一次の目的は「受験生の負担の軽減」であると言われ、国立大志望者約三十三万人が受験した。しかし実際は受験科目が増え、それに向けたカリキュラムが編成されて、受験生の負担は軽くなるどころかますます重くなったのである。それでは真のねらいは何か。それは、差別選別教育をより大規模に徹底して進めることである。日本の学生数は六三年の八十万から七八年の一八六万人へと倍以上に増え、大学進学率は十五・七%から三十八・四%へと上昇している。このような大学の「大衆化」の中で日帝ブルジョアジーはより効率的な労働力商品輩出を大学に要求しているのである。とりわけ今日、日帝が八〇年代を生き残るために進めている航空機・コンピュータ・原子力を中心とした戦略産業を中軸とした産業構造の転換のためにも、それを担う人材をより効率的に育成し、また同世代に三〜五%存在するといわれる戦略的ハイタレント(「経済に關係する各方面で主導的役割を果たし、経済発展をリードする人的能力」)の養成をもくろんでいるのである。つまり共通一次試験によって東大を頂点としたピラミッド

を完成させ、各大学に効果的に人材を配置し、優秀な労働力を送り出そうということであり、その代償に受験生に与えられるものは、小学校から幼稚園にまで下がったと言われる受験戦争の構造化である。

さらに見ておかなければならないことは、この差別選別教育体制が「教育投資論」「受益者負担」のイデオロギーに貫かれていくということである。そして今日の大衆学費値上げ攻撃の中で、被差別大衆の多くが大学から排除されている。つまり差別選別教育体制からもあらかじめ排除され、低額労働力・産業予備軍として固定化されていくことになるのである。われわれはここに日帝の教育再編のねらいをはっきりと見てとり、これと徹底対決していかなければならない。

大幅学費値上げ攻撃を粉碎しよう!

国立大の現行十万八千円から十四万四千円への値上げをはじめとして、私大においても軒並み値上げが行われた。国立大は七一年度一万二千万円から七二年度三万六千万円、七五年度九万六千万円、七九年度十四万四千円というようにこの八年間で実に十二倍という驚くべき値上げ攻撃である。私大においては多くの大学で物価スライド制の導入ももくろまれている。

このような大幅学費値上げ攻撃は私大の場合、例えば中央大学・大正大学に例をとると都心から郊外への移転のツケを学生にまわすものとしてある。すなわち、移転とそれを通じての学生弾圧のための資金を学生からの収奪によってまかなうということなのである。しかも各私大当局が学費値上げの根拠にしている「赤字」とは新会計基準のカラクリによってデッチ上げられ正当化されているのである。

この新会計基準とは、七一年四月文部省令第一八号によって公布されたもので、おおよそ以下のような特徴をもっている。①基本金の消費収入からの控除、②減価償却費の消費支出への計上、③引当金の消費支出への計上である。①については、移転などの各大学の「自主的計画」にかかる費用を基本金として先取りし、その残りで大学の運営を行うというものである。つまり大きな計画をたてておけば、後の「運営資金が「赤字」ということになり、値上げの根拠にされてしまうのである。②は営利事業でない大学などでは減価償却費が計上されないのが当然なのである。しかもその対象となる土地や建物などは購入時に既

に消費収入から控除されているのだから、減価償却を再び計上することは二重計上であり「赤字」が増幅されるのである。③については、現在の教職員の半分が一挙に退職するという仮定に備えて、その巨額の退職金を引当金と称し毎年の退職金支出に加えて準備するというものであり、この新会計基準の導入によってすべての私大が大幅な「赤字」を計上することになったのである。

われわれはこのようなベテンを絶対に許すことはできない。しかもわれわれが注目しておかねばならないことは、国立大・私立大ともにこのような大幅値上げ攻撃がかけられてくるのは七二年度からだということである。六八〜六九年全国学園闘争で手痛い打撃を受けた日帝ブルジョアジーは、七一年中教審三三回答申で「国家社会の未来をかけた第三の教育改革」を叫び、①知識集約型産業構造への転換に見合った労働力商品の輩出、②「開かれた大学」として産軍学協同の推進、③「紛争」を起こさせない大学に向けて本格的に教育再編をおし進めていくのである。そして、この「第三の教育改革」の目玉として筑波大が開校され、その筑波大をモデル校としてつつ相次ぐ私大の都心から郊外への移転を見れば、七二年以降連続的に行われている学費値上げ攻撃の本質が、この「第三の教育改革」と表裏一体となったものであることは明らかである。そして、この攻撃は、日帝が八〇年代朝鮮出兵に向け、全社会的再編と産業構造の転換をより一層強力に進めようとしている今日より大幅な学費値上げ攻撃となって現われざるを得ないのである。

すべての学友諸君! 学生を体制に従順な労働力商品として送り出し、そのために非人間的ともいえる差別選別教育を行い、学生弾圧を行う。そしてそのために必要な資金を学生からの大衆収奪によってまかなおうというのである。われわれはこのような攻撃を絶対に許すわけにはいかない。学費値上げ阻止の闘いを広範な学友の怒りの中から組織しようではないか。

二、移転攻撃・学生弾圧を打ち破り、学生運動の新たな高揚をかちとろう!

学生管理支配体制の一時的導入をもくろむ移転攻撃を粉碎しよう!
先に見たように、当初東京教育大の筑波移

転として出発した筑波大学は、「第三の教育改革の目玉」として、まったく新しい大学として、七四年四月開校された。そこでは、学生の政治活動が禁止されており、集会やビラ・ポスターも許可制であり事実上禁止されている。全共闘運動の一大拠点となった教育大を「紛争を起こさせない」まったく新しい大学としてつくりかえることがめざされたのである。そして、この筑波大開校を突破口として、続々と大学移転攻撃がかけられてくる。中大多摩移転をはじめ、東洋大朝霞移転、大正大埼玉移転、法政大町田移転、さらに広大、早大と枚挙にいとまがないほどである。このようにならぬ大学にわたる移転攻撃は前例がないことであり、そこに、この攻撃が単に各大学独自の問題にとどまらない日帝・文部省の教育再編の意図を見てとるのでなければならぬ。そしてその意図とは徹底した学生弾圧の意図であることは明白である。

それは、具体的には、①主に新入生から行うことによって、在学生との分断をはかり闘争を起させない、②学生の既得権を一挙に奪い、当局―学生の力関係を逆にする、③都心から郊外に移転させることによって学生を政治的環境から遠ざけ、政治的活性化を阻止すると同時に、六八〇六九年のように大学が革命派の拠点となった場合に備え、政治の中心から遠ざけることを目的としているのである。

昨年、移転阻止闘争の高揚の中で強行された中大多摩移転を見てみよう。周囲に喫茶店の一軒すらもない人里離れた丘陵に建てられた校舎は、屋上にテレビカメラが設置され、学生を常時監視している。そしてキャンパスの設計は学生管理支配のイデオロギーに貫かれている。サークル棟は片隅に追いやられているし、集会に人が集まりにくくするためにコンピュータで人の流れを計算し校舎の設置が決められたとさえ言われている。そしてサークルに対しては当局の管理規定を強制し「合意書」を提出しないサークルに対しては部屋を与えないという攻撃がかけられている。大正大学の場合は、新一年生からの移転によって在校生と完全な分断がもくろまれていて、そして移転先の埼玉校舎にはサークル棟そのものが存在していないのである。

だがこのような移転による学内管理支配強化のめくろみにもかかわらず、中大の闘う学友は、一月一六―一七日学費値上げ阻止をかけた本部棟を占拠封鎖し、試験攻撃を粉砕して数百名の大衆団交を実現した。このことは日帝―文部省―当局がどのように学生管理支配を強化しようとも、学生の大衆的決起の前にはまったく無力であり、「紛争のない大学」など絵に描いたモチでしかないことをはっきりと示している。

全ての学友諸君！ 新入生諸君！ 学生運動の圧殺をねらう大学移転攻撃を阻止しよう。新入生―在校生の分断策動に抗し、結合を勝ちとり共に闘おうではないか！

4・20文部省通達―学生弾圧を許すな！

昨年三・二六三里塚空港突入・開港撃破の闘いにふるえあがった日帝は、四・二〇文部省通達を出した。この歴史的勝利の一端を管制塔戦士山下君をはじめ学生戦士が担ったことに対する報復として、さらに学生運動の新たな高揚の気運を察して、新大管法をチラつかせながら通達を出したのである。

四・二〇文部省通達

一、授業妨害とその他学内における暴力行

為や学内施設の本来の用途・目的を阻害する行為を許すことのないよう全学の体制を整えて正常な秩序維持のために適切な措置をとること。

二、学内掲示等（立看板・ビラの配布を含む）については学内規則に従い、管理の徹底を図ること。特に犯罪行為をそのかき、あるいは社会的秩序の暴力による破壊を呼びかけるような掲示物は直ちに撤去すること。

三、学籍ある者の修学の実態の掌握と指導管理を更に適確に行ない、また教職員の職務規律の厳正な保持に務めるとともに、学園内外を問わず、非違を犯した者についてはその責任を明確にし、それに対し適切な措置を迅速に講ずること。

四、学園の秩序維持のために必要な警察当局との連絡については「大学内における正常な秩序維持について」に留意し遺憾なきを期すこと。

この通達によって多くの大学で立看板やステッカーが撤去されたり破壊されたりし、また三里塚闘争被告に対する処分が行われるという弾圧がかけられてきたのである。しかもこの通達にもかかわらず、五・二〇再開港阻止の闘いが爆発するや、①大学内での起訴者は文部省に報告せよ、②育英会会員である学生が起訴者である場合は育英会でも処分を行う、という新たな通達が出されたのである。しかし、このような通達も闘いをおしとどめる力には何らなりえない。そればかりか、学生運動の新たな高揚をこの予防反革命攻撃を通じて、ますます確信するのみである。すべての学友諸君！ 四・二〇通達と学生弾圧に対し、八〇年代学生運動の大爆発をもって応えようではないか。

開始した闘いの胎動を更におし進めよう！

以上見てきたように、日帝による教育再編は八〇年代に向けた全社会的再編としてドラチックに進行しつつある。差別選別教育・管理支配攻撃・大幅学費値上げによる大衆収奪は「学生生活の甘い夢」さえも許さないものとしてわれわれに迫ってきている。さらに、「安定成長時代は失業者二百万人の時代」と言われる中で、大学の「大衆化」は必然的に「大学は出たけれど」といった事態を生み出している。しかしこのような厳しい状況の下で大衆的闘いの胎動は力強く開始されている。日大の学友達は昨年一二月、文理学部・法学部において起ちあがり、二千余の大衆的実力をもって右翼暴力ガードマン「関東軍」を追放し、テロ・リンチ、日常的検問をはねのけて日大アウシュビッツ体制と闘い抜いたのである。この日大や中大の闘いをはじめとして、全国の多くの大学でいまだ端初的ではあれ管理支配のクビキを打ち破って学生の闘いは開始しているのだ。この闘いを更に大衆的に、非和解的に進めることが問われている。すべての学友は闘いの最先頭に立ち、八〇年代の大高揚を準備しようではないか。

三、不屈に闘い抜く人民に

学び、三里塚・狭山・安保

―日「韓」闘争にすべての学園から決起しよう！

すべての学友諸君！ 新入生諸君！ われ

われは日帝の教育再編と闘うと同時に、全人民的政治闘争へと総決起していかなければならない。三里塚二期工事阻止・空港廃港の闘い、狭山再審棄却阻止・石川氏奪還の闘い、そして韓国民衆決起に連帯し朝鮮侵略反革命と対決する闘い。これらはすべて日本労働階級人民の未来をかけた闘いである。日帝の死活をかけた八〇年代朝鮮出兵と全社会的再編の攻撃が激化しつつある今日、これらの闘いはますます帝国主義と人民との攻防の環としてその重要性を増しているのである。

そして、われわれはこれらの闘いの中から、人民の闘いの魂、その心髄とも言うべきものを学ぶことができる。

三里塚の大地にしっかりと根をはり、強制収用の攻撃を前にして家を新築し、あるいは木の根用水を建設して人間要塞・土地要塞となつて闘う三里塚農民。

部落民ということだけで犯人に仕立てられ、獄中で十六年間無実を叫びながら、部落完全解放のために自ら捨て石となつて闘い抜く石川一雄氏。

そして朴反革命カイライの大統領緊急措置九号体制の下で、いかなる弾圧にも屈することなく湧きあがるように陸続と決起する韓国の学友達、民主人士達。

人民の本当の闘いとは何か、ここにはっきりと示されているではないか。

以上をふまえた上で、われわれの任務をはつきりと確認しておかなければならない。それは第一に、早期再審棄却を叫ぶ検察側意見書の提出によって重大な局面に突入した狭山再審闘争に総決起し、わけても五・二三には再審棄却阻止をかけた明治公園に総結集することである。第二に、森山運輸相の二期年内着工宣言を葬り去り、木の根用水の建設をめざして五・二〇三里塚闘争に起つことである。そして第三に、侵略反革命に向けた謀議をこらす六月東京サミットを粉砕することである。

すべての学友諸君！ 新入生諸君！ 当面するこの三つの闘いに学園から、クラス・サークルの深部から圧倒的に決起しようではないか！

4・22新入生歓迎集会の成功をかちとり、七九年学生運動の突破口を切りひらけ！

われわれは各学園における大衆的闘いの成果を総結集し、四・二二新入生歓迎集会の成功をかちとらねばならない。そして三里塚・狭山・安保―日「韓」闘争という全人民的課題と、学内課題との結合を実現していくのでなければならぬ。かかる方向こそ、日本学生運動の革命的再生を切りひらく道であり、われわれはこの四・二二集会を八〇年代の学生運動の新たな高揚に向けた第一歩として闘い取るうではないか。

すべての新入生諸君！ 先進的学友諸君！ 四・二二新歓集会に結集しよう。われわれは闘いの新しい息吹きと、八〇年代を担う学友達の熱気を共有するだろう。そして、日本階級闘争の先頭にたつて六〇年安保、七〇年安保を闘い抜いた学生運動の革命的再生という任務を共通の任務として確認しようではないか。われわれはその任務を天与の任務として担いぬく決意である。

学共闘に結集し共に闘いぬこう！ 四・二二集会を突破口に七九年学生運動を大前進をちとろう！

すべての学友諸君！ 八〇年代に向け共に進撃しよう！

中越戦争、カンボジア戦争 とプロレタリア国際主義

山波洋二

本年早々のプノンペン陥落を頂点とするベトナムーカンボジア戦争、そして二月の中越戦争と、劇的展開をとげたインドシナ半島の戦火は、やや下火になった。

だが問題の根深さは、日を追って明らかになり、被抑圧民族・人民の側に困惑が広がる一方、ベトナム戦争以降、追いつめられ続けた帝国主義はホッと一息ついている。

アメリカ帝国主義との長い戦争を共に闘いぬぎ、七五年四月、相ついで勝利したベトナムとカンボジアが戦火を交え、「ベトナムに対する米帝の侵略は中国に対する侵略であり、中国人民はベトナム人民のうしろだてである」と事ごとに語っていた中国が、「ベトナムに懲罰を下す」として侵攻し、中越双方に数万の死傷者を出したのである。

こうした事態を、一体、どのようにとらえればよいのか。根本的解決はありうるのか。こうした疑問に対して、当事国の公式声明は何も答えず、ただ他方を非難する。ベトナムは、十余万の大軍でカンボジア全土に侵攻しながら、この事実を否認し、救国戦線単独によるポルポト政権打倒であったと強弁してきた。

中国はベトナム侵攻に当たっての二・一七新華社声明等で、「ベトナム側の中国領土侵犯に対する懲罰の自衛反撃に決起した」としながら、その一方で、副首相李先念は「中越国境の係争地域はわずか六〇平方キロで、全部ベトナムに渡しても大したことはない」と語り、真の戦争目的が公式声明(「国境紛争」とは別にあることを認めているのだ。

このように事実を歪めたり、戦争の目的を隠すなどというのは、共産主義者の人民に対する態度として許されないことである。同時にウソで固めた政治宣伝で通さねばならないところに、この戦争が中国やベトナムにとって大義なき戦争であることを自己暴露しているとも言えよう。

それゆえ、全世界を失望させてまで強行された「労働者国家」間戦争という歴史的な新事態の背景と内容がわれわれの手で明らかにされねばならず、この説明が本論の第一の目的である。

その際、中国やカンボジアもさることながら、とりわけ、輝やかしい革命的伝統をもつベトナムの変化に注目しなくてはならない。われわれはこれまでベトナムから多くを学んできた。戦略問題は日本に直接適用しうるべくもないが、①二十数年の言語に絶する徹底抗戦によって米帝を放逐し、帝国主義の世

そのりっぱなベトナム共産主義者達が現在直面している問題を、外面的結果の論評ではなく、対象に即し、より内在的に把握返すことを通じ、失敗の教訓からも学んでいきたい。本論の第二の目的は、「労働者国家」間戦争という新事態の世界的な位置を指定することを通じ、われわれのめざしている方向を豊富化するところにある。

ブルジョアイデオロギーは「社会主義の破産」を叫び、革共同両派は自ら落ちこんでいる内ゲバ世界を忘れて「スターリニストの破産」を呼号している。

しかし、そのような客観主義的ナデ切りによって自らが正当化されるわけもなければ、まして被抑圧民族人民解放運動のこの重大問題を解決する糸口をつかめるものでもない。世界史がわれわれに強い内実をつくりだしていく素材としようではないか。

ベトナムーカンボジア戦争の背景

中越戦争でピークに達した新インドシナ戦争の導火線となったのは、まずベトナムーカンボジアの国境紛争である。

対立が公然化したのは、四・三〇解放直後フーコク島・トーチュー島での衝突なのだがこれはフランスが両国の国境を画定せずに対立を煽り、分断支配してきたことによる歴史的問題であり、解放勢力によって解決可能だったし、実際、交渉がもたれた。

それが決裂し、七七年四月のカンボジアによるベトナム国境襲撃―それへの報復、同十二月の国交断絶、そして本年のベトナムによるポル・ポト政権転覆と、事態が悪化していった背景は国境紛争だけでは説明しえない。

①国境問題を含む歴史的な両国間対立、②両国の国内情勢が戦争に向いやすかったこと③中ソの関わり、などトータルに考察しなくてはならないであろう。

第一に、人口五千万のベトナムに対する小国カンボジアの歴史的な民族的恐怖である。①サイゴンなどメコンデルタ地方も二〇〇年前まではクメール王国領であったものがベトナムに蚕食された。②植民地時代には、ベトナム人官吏や越僑が、華僑と共にフランスの手先となってカンボジア支配に当たったことなどへの反撥が底流にまず存在する。

カンボジアへのベトナム革命の影響の特殊な大きさをみることで明らかにされよう。

カンボジアに対するベトナム革命の影響

ポル・ポト、イエン・サリ、キュー・サンファンらの前身は五〇年代のフランス留學生同盟であり、帰国後はキューやフー・ニムが入関するなどシアヌーク政権に協力したが、農民反乱の続発を契機とする弾圧によって六〇年代なかば次々と地下活動に移り、クメール・ルージュのゲリラに合流した。

カンボジア革命は、米帝によるロン・ノルクーデター―シアヌーク追放を機に人民の怒りが爆発し、クメール・ルージュとシアヌーク派とで七一年結成された王国民族統一戦線の勝利へと急展開したのだが、この過程で、クーデター当時百人といなかったとさえ言われるポル・ポト派が権力を握りえたのはシアヌーク派が自作農からなる兵士を圧倒的に擁護しつつも軍事や組織を指導しえない貴族を幹部としていたことと、ベトナムの限界性の結果である。

ベトナムは、ロンノルクーデター直前までクメール・ルージュを弾圧するシアヌークを支持し続けた。シアヌークの反米中立路線がカンボジア内のベトナム軍聖域を保障したからである。七二年パリ協定後は、カイライ政権との交渉をカンボジアにまで強要して反撥を買った。

この態度は、ベトナムが批判してやまないジュネーブ協定における中ソの大国主義的態度、つまり朝鮮戦争後の「平和共存」なる大国利害、自国の利害のために小国の革命に不利を強いたと同じ性格をもっている。

少なくともこうした結果、ベトナム派と呼ばれた人々はカンボジア人民の支持を減じ、ベトナムの隣国に、反ベトナム政権が生まれることになった。

解放後も、ベトナムがカンボジア領内からなかなか撤兵しようとしなかったことなどから、ベトナム・ラオス友好条約(七七年)に明記されている「ベトナム・ラオスの特殊な関係の擁護と発展の義務」がカンボジアにも「インドシナ連邦」として押しつけられるのではないかと疑念を生じさせた。

「インドシナ連邦」は理念としては誤りでなく、三国の協力は望ましいであろう。ただし、それを實現する過程が問題であり歴史的なベトナムによる抑圧関係に踏まえ、経済面の格差や民族感情を配慮し、政治的譲歩などによって連帯の内実をつくりだしていくことが優先しなくてはならない。

ところがベトナムは、歴代の中国王朝のベ

トナム侵略は博物館に溢れさせながら、カンボジアとの民族的抑圧―被抑圧の認識については欠落させている。

自立を希求する小国政権に戦争の因を帰すのではなく、自らの関わりの問題点を切開くことが、抑圧民族側の共産主義者にまず問われなくてはならない。

抑圧民族側の共産主義者にとって、①あらゆる民族抑圧に反対し、被抑圧民族の自決権を擁護すること、②被抑圧民族の側に最大限の信頼を保障し、十分な譲歩によって、過去の歴史において抑圧民族が加えた不信・疑念を償うこと、などが必要であった。

しかるに国境紛争や、今回の戦争でベトナムは逆に力に訴える大国主義に走っている。

「インドシナ連邦」問題についても、必要なのは、その意図を隠して「三国の戦闘的連帯」と言いかえることではなく、カンボジア人民の信頼を得るための具体的行動であった。

ところがカンボジア人民に与えられた判断材料は、①経済困難脱出のために強引な原始的蓄積を通じた工業化を要求されているベトナムのようす、②モデルケースとしては、ソ連と東欧諸国の収奪的關係、といったものであり、ベトナムによる歴史的圧迫の記憶と相まって、ボル・ポトなどの悪意ある煽動には説得力があった。

こうした両国間対立が、国境紛争を通じて拡大し、カンボジア内戦に乗じて一気に親ベトナム政権樹立に走ったというのが、ベトナム―カンボジア戦争の一側面であろう。

もう一つの戦因として、カンボジア内戦―ボル・ポト政権自滅の側面も無視できない。

カンボジアの分裂を生んだボル・ポト政権の人民抑圧

カンボジアでは、解放後の数年間、現実の民衆の意志や希望が観念的急進的政策に踏みこまれ、百万人以上が殺され、その結果、ベトナム派を核とした反乱がひろがったといわれる。

たしかにボル・ポト政権下のカンボジアでは、①総人口八百万のうち戦争中で三百万を占めるに至ったプノンペンや都市のすべてを廃絶し、農村に移して開墾生活と自給自足を強要した。②通貨・郵便から宗教にいたるまで旧社会の一切をその存在根拠とは別に表面的に廃止、③カイライ軍将兵・役人から医師・教師・技術者まで旧体制「受益者」への徹底報復、④男女別集団労働生活―生活の兵営化等、極端な変革を急いだ。

この背景には、第一に独特のイデオロギーの政策化の側面がある。すなわちボル・ポト派が解放闘争の過程で温めてきた徹底した「自力更生論」と「軍隊的集産主義」の都市生活者等への教条的適用であり、征服意識―報復主義によってこれが苛酷化したのである。

しかし、①病人、老人等、人間的要素への配慮もなく無差別的な移転強要で徒らに犠牲者を出したこと、②家族の解体、③反抗者への大量処刑、④少数民族大量虐殺、⑤華僑、越僑迫害数十万難民化、等の強行策の結果は当然にも、党内闘争、権力闘争を発生させた。

もともと、こうした硬直した路線をうち出した第二の背景として、ボル・ポト派が決して安定政権でなく、少数派であって、シアヌーク派や、ベトナム派、知識分子など反対派の力を分散させ、人民への影響力を断つための政策という側面もあったのである。難民がふえ、暴動やクーデターに発展して

中国・ベトナム・カンボジア関係年表

1930. 2	ベトナム共産党創立 (同10月インドシナ共産党と改称)
45. 9	ベトナム民主共和国成立→第一次インドシナ戦争はじまる
51. 2	インドシナ共産党解散、ベトナム労働党・カンボジア人民革命党発足
54. 7	ジュネーブ協定、17度線以北解放
60	ベトナム労働党3回大会、「南解放」決議、同年南ベトナム解放戦線成立
70. 3	カンボジアでロン・ノルクーデター、直ちにカンブチア民族統一戦線結成
72. 2	B52の北爆が最大規模になる中、ニクソン訪中
73. 1	ベトナム和平協定(パリ協定)調印
75. 4.17	プノンペン解放、4.30にはサイゴン解放
76. 7	南北ベトナム統一 (ベトナム社会主義共和国成立)ベトナム共産党4回大会、第二次5ヵ年計画を宣言
77.12	カンボジア、対ベトナム国交断絶
78. 3	ベトナム南部で商業を国有化→華僑に大打撃。大量帰国はじまる
6	ベトナム、コメコン加盟
7	中国、ベトナム援助全面停止
12	カンボジア救国戦線結成
79. 1. 7	プノンペン陥落、カンボジア人民共和国を宣言
2.17	中国軍、ベトナム侵攻。ベトナム―カンボジア友好条約調印
3	中国撤兵開始

も不思議とはいえない。かつてロン・ノル政権に対抗すべく、カンボジア王国統一戦線を組織し訓練したベトナムは、こうした反乱軍や難民に肩入れしたのである。

以上見てきたように①ボル・ポト政権の排外主義的人民動員の結果としての国境紛争の悪化、②人民抑圧と反乱によるカンボジアの分裂、がベトナム―カンボジア戦争の原因であることは明らかだが、国境防衛戦争は正し

いとして、越境どころか、敵対政権打倒にまで走ったベトナムの行為は決して正当化できるものではない。これは民族自決権の蹂躪であり、ベトナムの意志をカンボジアに押しつけたのである。

ベトナム「一國社会主義」建設のざ折

四・三〇解放と同時に、ベトナムが直面したのは、百年間の植民地支配と二〇年間の対米戦争の惨禍の中で、いかに復興と「労働者国家」建設をとげていくかという大問題であった。

とりわけ米帝との二〇年戦争の破壊と荒廃は、①南ベトナムだけで二千万発という爆弾が直径一五m、深さ一〇mの穴をあけ、地形が流水・生態系を変えて災害を異常発生させ枯葉剤などが森林・田畑を汚染し、以前は毎年数十万トンの米輸出国であったのに、七〇年以降は輸入国になってしまった等国土の破壊、②三百万人戦死(うち百五十万人が共産党員といわれる)、孤児四十万、肺病一〇〇万、文盲三〇〇万、アヘン中毒がサイゴンだけで五十万、売春婦五十万、混血児五十万、性病三〇〇万という人的損失の他、戦火を逃れ、生産意欲を失われ、サイゴン等都市に流入した四〇〇万難民など数百万失業者の問題や、植民地的文化・経済を享受し、労働を蔑視する南ベトナム上層、華僑、旧カイライ軍将兵、官僚の敵意などをも氾濫させており、ベトナム共産主義者に新たな試練を投げかけたのである。

まさに革命にとって権力奪取は完了ではなく第一歩だったのだ。ベトナムはここで、急速な南北統一と、工

業化による問題解決をはかった。

七六年二月、ベトナム共産党第四回代表者大会は、三回大会以来十六年間の南解放の勝利を総括すると共に、野心的な第二次五ヵ年計画への民族の意志結集を図った。

「いまだ小規模生産が一般的である社会から資本主義の発展段階をへずに社会主義へ直接進む過程にある」という情勢分析に立脚して二〇年間で社会主義の大生産を完成させるという大目標実現のために、①科学技術の革命の重視と工業プラントの導入、②軽工業振興による外国との経済関係の拡大、③農業の飛躍によって「社会主義的工業化の蓄積をつくりだす」ことを掲げた。

とくに八〇年までの第二次五ヵ年計画では七五年比二・五倍の機械生産、二一〇〇万トンの食糧(七五年一〇〇万トン)、一〇〇万トンの海水魚、一〇〇万ヘクタールの荒地開墾という数字がめざされた。

第二次五ヵ年計画の破産

第一に、五ヵ年の総投資額七十五億ドルのうち、半分を外国に仰ぎ、とくに二五億ドルを資本主義国の投資に期待したこと。

米帝はパリ協定において、行方不明米兵の消息追求の代りに、米越国交と戦後復興への無条件寄与―五ヵ年間に三十二億五千万ドルの無償援助を約束しながら、ニクソンの後継者たちが、これをホゴにしている。

ECや日帝もベトナム革命への階級的憎悪をむき出しにして大平政権は、なげきの援助をカンボジア戦発生と共に凍結した。

中国もまた、七五年無償援助停止、七八年援助全面停止の打撃を与えたのである。

第二の問題は、工業化のための蓄積を農業に求めすぎたことである。

ベトナムの外貨不足は、たとえば日越貿易ひとつ見るだけで一目瞭然である。七六年実績で、ベトナムは日本から機械一三七億円、化成品一一五億円、鉄九二億円を輸入し、無煙炭八〇億円、水産四二億円を輸出して三倍の入超となっている。

これを補うため、ベトナム国営農場や、荒地開墾による「新経済村」では輸出用のパイナップル、さとうきび、ゴム、コーヒー、タバコを中心にし、また工業用作物栽培によって工業を興そうとした。綿・大麻・桑などで

ある。
このため、主要食糧たる米作は比較的政治意識の低い一般農民にまかされ、雑穀生産など食糧増産も図られなかった。
そこへ七六、七七と二年続きの早魃と、七八年八月の大洪水の被害が直撃すると、華僑商人による投機・闇市・密輸・隠匿が横行し、米価は暴騰し、飢饉が始まり、米百数十万トンの緊急輸入が更にベトナム経済を圧迫した。こうした第二次五カ年計画のさ折は、農相やサイゴン当局者の更迭によつては解決しなかつた。

問題は第一に、「重工業の発展を優先させる」
二〇年間で社会主義的大生産を完成させるという一国社会主義建設可能論が厳しい現実の前に破産したためであり**第二には**、ベトナム南部農民やサイゴン市民の動員に失敗した官僚主義にあったのである。

だがベトナム当局の関心は、農業問題決定への農民参加を通じた積極性の培養の方策を練るとか、コンミュンなど人民の政治的動員によつて問題を討論・解決し、革命の内実を深化する方向にはむかわなかつた。

この危機をのりきるために、①タイを含むインドシナ四カ国によるメコン川開発構想（カンボジアのみ反対）の推進、②コメコン加盟ソ連による援助拡大といった国際協力と共に、③七八年三月、商業流通機構の国有化、④同十二月、南ベトナムでも土地私有禁止（ヘクタールの自留地を除いて無償没収）等国内のしめつけが強化された。

ベトナム農業の破綻を政治的にとらえ、南部農民の真の階級意識の喚起によつて克服するのでなく、治水のような技術的問題や、外国の援助、更には華僑など外在的要素のせいにして帰したが、これはあまりに一面的であり、問題を一層混乱させた。

第一に、①メコン開発を妨げ、②穀層地帯一〇万ヘクタールを荒廃させ、住民に洞穴生活を余儀なくさせる国境紛争の元凶であり、③大量の難民を流入させる、ポル・ポト政権に対する強硬論が盛まった。

第三にに民族排外主義の台頭である。自らの「労働者国家」建設の苦闘を他国のせいにして帰した途端に、主体的刻苦奮闘に代つて、ポル・ポト政権や他の、援助しない中国、外国人という事で戦争中の徴兵もなしにシヨロン等で繁栄した上、いまベトナム経済を攪乱する華僑といった人々への狩りたての衝動が発生した。

こうした民族排外主義の自然発生性に迎合し、この民族的熱中によつて威信の回復を図つたのが「解放者」を装ったカンボジア侵攻の無視しえない一面であつた。



第三に、華僑圧迫と、対ソ接近に加えた、カンボジア戦争は中越関係を最悪の状態に叩きこんだのであつた。

中国によるベトナム侵攻の反動性

二月初旬の訪米訪日に際して、ベトナムに対する懲罰行動を公言した鄧小平の帰国を待つて、二・一七、中国はベトナム侵攻を開始した。

ランソンなど五省都制圧ののち、撤退が行われたのだが、小衝突は四月に入っても続いている。

ベトナム・カンボジア戦争に先立つ昨年九月、李先念は、中越両国間の係争点として、①西沙・南沙郡島の領有、②トンキン湾の領海線、③陸地の境界線、④歴史的な関係、⑤在ベトナム華僑問題の五点を指摘した。

国境紛争は直接的武力衝突として大きいし、南シナ海の石油資源もからんでいるのだが、日中間の釣魚台問題やビルマ国境等と比して中越国境が極端に悪化した理由にはならず、李先念自身がそれを認めていることは冒頭に述べてきた。

華僑問題はたしかに切実であろう。「四つの近代化」の資金面や技術面の必要から華僑優遇策をうちだした中国の思惑に反し、ベトナムが民族経済の利益のために商業つまり華僑の生業を奪つたのは少数民族迫害の側面をもつと言えらる。

しかし、プロレタリア革命の過程で、ブルジョアの特権たる生産手段とか、流通の固有化を早晩させて通ることはできない。

また華僑迫害はポル・ポト政権によつていち早く、しかも残酷に開始され、ベトナムに流入して在ベトナム華僑の不安を誘つた経緯がある以上、ベトナム非難は片手落ちである。

十万人以上が中国へ帰ろうとしたといわれるパニックについても、中国大使館によつて流された「中越戦争が発生する。その場合、虐殺がある」というデマが、急に強まったベトナムのナショナリズムの下で不安をおぼえていた連帯感の強い華僑社会に一気に流れた結果であることを否定できない。

そうして帰国した華僑を中国は保護するのではなく、ベトナムに追い帰そうとしている事実を見る時、中国は華僑をベトナム非難の口実づくりに、単に利用したにすぎないのではないだろうか。

同じことがカンボジア問題にも言えるところから中国の問題性があるように思われる。
①文革派の党副主席で失脚寸前の汪東興が十一月に二日間の共同声明もないカンボジア

訪問をして以来、何らの援助協定も公式交流もないこと、②戦う気もないシアヌークを歓迎したのに対し、ポル・ポト派には冷たく、亡命政権も全然具体化しないこと、等々を見る時、中国が誰かのために戦つたのではなく、中国自身の必要に基づいて戦争した事実が浮びあがってくる。

三月五日発表された新華社声明「勝利宣言」は、①ベトナムの侵略的なごう慢さを叩き、「不敗」の神話を粉砕した、②「アジアのキューバ」を破り、東南アジアでのソ連の侵略と拡張計画に大打撃を与えた、と全人民的な総括をしているし、戦争直前の鄧小平の米日首脳に対する発言は「ソ連は今や新たな世界大戦の火床となった。キューバ、ベトナムのような衛星国を介在させたその拡張政策に、他の国が十分な精力をもつて対抗していかないからだ」等というものであり、今回の中越戦争にかけた中国の戦争目的の根本が、ソ連、その先兵と見るベトナムとの戦略的対決であつたことは明らかである。

つまり、バングラディッシュ・アンゴラやランなどソ連が支持する革命運動を、その民族解放闘争の本質をぬきに、すべて「ソ連の陰謀」として敵対してきた延長上で、ベトナムをとらえた結果として中越対立が悪化したのである。

こうした「三つの世界論」「反帝反覇権戦略」なる帝国主義に組みし、ソ連を主要な敵とする反動的な戦略の発動として、ベトナム侵攻があることを第一に見なくてはならない。ベトナム侵攻の反動性は、第二に、「ベトナム小覇権」とか「懲罰」とかの言い方に現われてくる。

インドシナ半島でベトナムが指導的地位を占めようとするのを拒否するのが実は、中国の東南アジアでの大覇権や「中華思想」に對立するからであり、対等の国に対しては考えられない懲罰・制裁等が可能な属国としてベトナムを見ている大国主義の表れである。

第三には、中越矛盾の処理に於て、プロレタリア国際主義をめざさず、民族利害をゴリ押ししていることである。

ベトナムは六〇年代には、平和共存路線のソ連に批判的だったが、七二年北爆が最大規模に達した中で中国のニクソン招待を、「おぼれる強盗に浮袋を与える行為」として批判した頃から中越関係が悪化した。

帝国主義が第三世界の革命運動に迫いつめられる中で、一連の大国にだけ緩和策を用い、小国の圧殺に全力を注ごうとするのに乗り、やれプラント導入だ、武器輸入だ等と進むことが一國の利益に世界革命や小國の利害を従属させ、敵に売り渡す行為だとするベトナムの批判は正しかった。

ここから論争が始まり、「三つの世界論」をも批判し、「社会主義の団結」を説くベトナムを「ソ連の手先」ときめつける中で対立がエスカレートし、国境紛争等に拡大し、またカンボジアを煽動して対ベトナム紛争を「反小覇権闘争」なる泥沼に追いこんだ。

この矛盾の解決のカギはやはり大国—中国の側がにぎっているのである。
両國の「労働者国家」建設段階の格差や、歴史的抑圧—被抑圧の関係を踏まえ、援助や譲歩を行うことが信頼関係回復に前提的に必要なのである。

「援助」といっても、鄧小平のように、「二〇年間に二百億元も援助したのにベトナムは恩をアダで返した」というようなのは本當の援助でなく、前貸しで隷屬を買いとらうというさもし根性にすぎない。

歴史的な抑圧関係が現在にも小国に不利を及ぼしていることへの償いの意味をこめ、労働者国家間の国際主義的連帯の内実を全人民的合意によってつくり出していく努力こそが問われているのである。

それはナショナリズムに押腕するたやすさに較べて困難な道であろう。しかし、ロシア革命のスターリン主義的変質にはじまる、国際共産主義運動の否定的事態は、プロレタリア国際主義の復権による以外、絶対に克服の道はないのである。

まとめ

以上、「労働者国家」間戦争という新しい事態は容易に対象化しえない問題も多いが、ひとまず、背景と内容の評価からまとめてみよう。

第一に確認できることは、どの当事国も正しいということではなく、過渡期世界における被抑圧民族人民の勝利的前進を進展させていく要素はいずれにもない、ということである。

この戦争は何一つとして新しいものを生み出さず、人民を鼓舞せず、混乱させ、帝国主義者だけを喜ばせた。

ベトナムの「カンボジア人民支援」の美名も、①民族の解放は民族自身の事業でなくてはならない民族自決の原則に反したベトナムの都合のよい「解決」の押しつけにすぎず、②両国対立の根本がベトナム革命の利害にカンボジアを従属させた点にもあることの把握返しに欠落し、③現にベトナム一国社会主義論の挫折の打開を「インドシナ連邦」やナショナリズムで隠蔽する役割にある、等を見ると、決して世界革命の一環ではなく、一国の利害に小国を従属させる勢力拡大運動ではないことは明白だ。

中国も同様である。

「反覇権」「反ベトナム小覇」の怒号も結局は、自らの東南アジアでの覇権や、インドシナ連帯の分断をめざし、そのためには帝国主義やASEANを利す反動的な代物である。

とくに中国は、今や単なる民族間対立ではない中ソの国際分派闘争の否定面をモロにもちこみ、そのパワーゲームでのメンツをたてるために七〇年頃の残虐なB52猛爆の跡をとどめるトンキン地方を破壊しつつ、多くの戦士たちに血を流させた罪は深いものがある。

また両国とも国内に難題を抱えていたのだ

が、それをコンミュニオンや大衆路線の模索によるのではなく、安直な民族排外主義と戦争を通じた人民結集でのりきろうとした点でも誤まっている。

第二に確認できることは、経済危機—ナショナリズムへの結集—戦争—経済危機の悪循環を断つには、「労働者国家」間のプロレタリア国際主義に立脚した連帯を具体的に積みあげていく以外にないということである。

権力奪取を果したばかりの国家間には植民地時代の悪しき遺産が山積しており、国境紛争もその一つである。英仏などは自らの軍事的弱さを人民の分断でカバーしたのだから、複雑で不当な国境線をわざと引いている。

こうした錯綜を解決する鍵は大国の方が握っているのである。

格差や歴史的な抑圧関係を踏え、譲歩や援助によって人民の共感と信頼を得ていくことの可能な立場にあるからだ。

だが現実には、①援助といえばヒモつきか代償期待、②革命期にはニクソン訪中やパリ協定強要に見られるように小国の革命を帝国主義との取引材料化し、③革命後も勝手に懲罰や干渉をくり返すなど大国主義がまかり通っているのである。

民族問題をこえられない「一国社会主義論」を克服し、プロレタリア国際主義の戦取めざして奮闘せよ

最後に、この事態に現れた現代世界の動向にふれておこう。

まず第一に、「労働者国家間」戦争をもたらしたのが帝国主義の衰退の結果であって、決して強さの現れではないということである。

「労働者国家」間のおおいがたい対立や、国際共産主義運動の分裂はこれまでもいくつでも存在したが、それが戦争として発現するわけにはいかなかったのである。

強大な帝国主義の包囲下の内争は、スペイン革命のように容易に共倒れを招いた。

だが今日、帝国主義は弱体化し、「労働者国家」の分裂につけこむと言っても、それは双方を葬る漁夫の利を狙う立場ではなく、どちらの陣営に属したらより延命できるかという、丁度、第二次大戦時のソ連の立場に近いものへと逆転している。

だがこれは「労働者国家」間の平和を外的に強制する者が去ったことを意味するのであり、中越間や、ベトナム—カンボジアの戦争が偶発的な問題でもなく、両国間に個有の問題で

もない以上、「労働者国家」間戦争は今後いくらかでも起りうることを確認しなくてはならない。

とりわけ、中ソ対立から、ベトナム—カンボジア戦争まで、民族対立や国際共産主義運動の分派闘争が、ただ一つの矛盾も解決しえずにいる現実を直視しなくてはならないであろう。

従って第二の確認点は、今日の帝国主義衰退期の世界革命の遅延は、帝国主義の包囲等のせいにするにはできず、すぐれて革命主体の問題にあり、その一つとして民族問題をこえられない一国社会主義論が全世界人民に社会主義への幻滅を与え、ブルジョアジーの延命を助けていることが指摘できる。

だがその主体的問題は、何もう「スターリニスト官僚」に限ったことではなく、われわれ帝国主義国プロレタリアートにも存在している。

ベトナム—カンボジア戦争には日本人民の責任も無視できない。①日帝が全面加担した米帝による侵略戦争の爪痕が影を落していること、②中ソには緩和策をとる帝国主義が、ベトナムやカンボジアには依然きびしく世界市場からの排除など封鎖を続け、それが、たかだか「二十一年間に全家庭にテレビと洗濯機を！」をめざしたベトナム第二次五カ年計画を画餅に帰せしめた一因をなしたこと、③今回の中国のベトナム侵攻で日米は共犯。少なくとも日中、米中条約ぬきには考えられなかったこと、等々を見ると、プロレタリア国際主義の内実をうちたてるべく努力すべきなのは実はわれわれなのではないかと考えざるをえない。

当面は、アジア人民への血債にかけて日本帝国主義を打倒すべく奮闘しなくてはならないが、より大切なことは、この過程でも、問題の解決をはかる際、常に自らの帝国主義的実存をとらえ返し、プロレタリア国際主義を貫く訓練と体得につとめることであろう。

いかなる苦境にあっても挫けず、団結して闘い続けてきた偉大なインドシナ人民は、必ずや自らの手で打開の道を見つけ出すであろうが、われわれもまた、その不屈の闘魂に学び、自らを鍛えぬこうではないか。

世界革命の道は銀座通りを歩くのと違ってまっすぐ平坦にのびてはいない。

困難にあっても逃避するのではなく、全知全能をかけて主体的に格闘し、革命的に解決すること、これによってだけ先人達は革命を前進させてきたし、それは現在も未来も同様であることを知ろうではないか。

人民の戦旗かかげて

荒 岱 介

四六版 490 ページ
クロス装製本 カバー付
定価 1500 円

戦旗社

好評発売中!

■一九七四年狭山九月決戦—カ月の現地ハンスト戦、七五年九
・三〇天皇訪米阻止火災ビン闘争、七六年十一・一〇天皇式典
粉砕火災ビン闘争など、闘うアジア人民、韓国民衆、部落大衆、
三里塚農民に学びつつ、必死の實力決起をつづけてきた戦旗派
の重要政治論文集。